

## 感恩不盡

～私たち日本人は李登輝元総統閣下に戻しきれない恩がある～

さる7月30日に李登輝元総統閣下がご逝去されました。偉大なる指導者の訃報に接し、ご遺族ならびに台湾の皆様にご心からお悔やみを申し上げます。

当協会は(株)日本防災技術センターを前身として日台間の防災技術交流に取り組み、李登輝総統閣下(当時)より様々な御厚誼を賜りました。また、2011年秋に挙行了しました札幌日台親善協会・第1回台湾親善訪問の旅では、閣下に貴重なご講演を賜り、会員一同の一生の思い出となりました。もうお会いすることは叶わず、惜別の念に堪えません。

李登輝元総統閣下の功績は今や万人が知るところです。第二次世界大戦の終結後、権威主義体制に置かれた台湾にあって民主化と本土化を推し進め、二十一世紀に続く自由と繁栄をもたらされました。そして、李閣下は台湾人のみならず日本人にも貴重な遺産を残して下さいました。それは「民主主義の価値観」「歴史に対する向き合い方」です。

李登輝元総統閣下はその生涯において大日本帝国・中華民国という二つの異なる政治体制を体験されました。多くの台湾人がそうであったように、李閣下も様々な苦難を経験され、心の中で多くの葛藤を覚えたことと聞き及びます。戦後に台湾社会の価値観が一変し、228事件に代表される凄惨な衝突が繰り返され、閣下ご自身も政治的迫害を受ける虞があったといえます。しかし、激動の世界にあって、李氏は農業経済学者として生きる術を学ばれました。そして、政界に入られた後は台湾の人々が何を求めているのか、何を必要としているのかを常に模索しておられました。その政治的集大成こそが「民主化」「本土化」であり、その根底に祖国台湾に対する愛情とキリスト教への信仰があったことは多くの著作で読み取れます。

かつて作家の司馬遼太郎氏は李登輝総統閣下(当時)との対談で「台湾に生まれた悲哀」を取り上げていました。この「台湾に生まれた悲哀」を「台湾に生まれた幸福」に変えることが、神から与えられた李閣下の使命であったと改めて思います。「民主主義の価値観」を体現するために歩んでこられた道程に、私たちは敬意を払わずにはられません。

一方で、戦後の歴史教育を受けた多くの日本人にとって、台湾の植民統治は負の遺産・謝罪の対象として長く受け止められていました。しかし、李登輝元総統閣下は台湾の歴史にとって日本の果たした役割、特に台湾社会の近代化に果たした役割を肯定的に評価しておられました。法治主義・順法精神・公教育・医療衛生・社会基盤の整備普及は日本のお蔭だと述べられていたように、日本への敬意と愛情を常にお持ちでした。李閣下は、戦後の日本人が

忘れかけていた日台の歴史的つながりを呼び覚まし、多くの日本人に「歴史に対する向き合い方」を教えてくださいました。この教えがどれだけ多くの日本人を勇気付け、自国の歴史に誇りを持たせる契機となったことでしょうか。

近年多発する自然災害でも、日台の協力関係は深化しています。思い起こせば2011年の東日本大震災で我が国が未曾有の危機に見舞われた時、台湾は真っ先に救援に駆けつけ、かつ多くの人々から莫大な支援を寄せていただきました。この出来事が多くの日本人に感動を与え、台湾への親近感が増したことは記憶に新しいと思います。これを契機に、台湾が困ったときは日本が助け、日本が困った時は台湾が助けるという国民レベルの連帯が育まれました。これほど心の結びつきが強いパートナーは世界的にも例は無いと言われており、歴史的な繋がり無しに説明することはできません。「日台両国は運命共同体」という李登輝元総統閣下のお言葉を、私たち日本人は改めて胸に刻み込んでおくべきでしょう。

李登輝元総統閣下が示された日台友好の精神は、今や私たちにとって大切な宝物であります。この返しきれない恩に報いるためにも、私たち日本人は日台友好の道を誠実に愚直に歩んで行くことを閣下の御霊にお約束申し上げる次第です。安らかにお眠り下さい。

令和2年（西暦2020年）8月

札幌日台親善協会・会長	木村勇介
同副会長	指川 司
同副会長	和田一仁
同理事	安藤康博
同事務局長	南 望